

競進社社長木村九蔵の生涯



木村九蔵は弘化2年(1845)に上野国緑埜郡高山村の高山寅三の五男として生まれる。幼名は巳之助で、幼い頃より養蚕に興味を持ち、13歳の時、父の隠居所の二階で蚕を飼い大成功を収めたことから、兄の高山長五郎と共に兄弟で養蚕の飼育の研究に励んだ。元治元年(1864)に武藏国児玉郡新宿村(現神川町)の木村弥次右衛門の娘しまと結婚する。

慶應3年(1867)に新宿村に居を定めて自立し、名前を木村九蔵と改める。明治5年(1872)には新しい飼育法「一派温暖育」を世に発表する。九蔵の自宅には九蔵の飼育法を学ぼうとする者が増加し、明治10年(1877)には、九蔵は周辺の同志と養蚕改良競進組を結成した。目的は広く組員を募って、新飼育法の普及を図り、農家の経済と生活の向上を行い、ひいては国家財政の向上を目指したものであった。

良い繭を得るには蚕種の改良が急務であるという信念の元に蚕種の改良にも尽力し、明治13年(1880)には新品種「白玉新撰」を世に発表した。九蔵の率いる競進組の名声は次第に各地に広がり、教えを請う者はさらに増加し、自宅で行っていた指導環境は手狭となり、明治17年(1884)に組織を整備して養蚕改良競進社とし、広い敷地と交通の便利な場所を選定して、児玉町に新たに養蚕伝習所と事務所を開設した。

九蔵は組員の技術の向上のため、繭の品評会を開催したが、手始めに明治14年(1881)には群馬県鬼石町で高山組・競進組合同の共進会を開催した。さらに明治16年(1883)には埼玉県児玉郡沼上村(現美里町)で第1回競進組共進会を開催し、以後も継続して開催して組員(社員)の技術向上を図った。

九蔵は、明治22年(1889)に政府よりヨーロッパの蚕業視察を委嘱されて、イタリア・フランス両国の蚕業事情について視察し多くの知見を得て帰国した。蚕種の重要性についての認識をより強め、蚕種保護のために明治24年(1891)に日本蚕種貯蔵株式会社を本庄町に設立し、初代社長の任に就いた。さらに、これからの養蚕の普及には伝習所での実技伝習だけでなく、学科を加える必要性を痛感し、学校教育を開始するために明治30年(1897)に、養蚕伝習所を競進社蚕業講究所と改めた。

九蔵は競進社及び蚕種貯蔵会社の社長を勤め、さらに自らも蚕を飼育し蚕種改良に努めるなど激務の中、明治28年(1895)正月、病に倒れ入院した。6月に退院といったんは回復したかに見えたが、明治29年(1896)12月、病気が再発し、本社(事務所)の一室に病室を構え療養し、翌年1月に青柳村新宿の自宅に帰り静養に勤めた。春蚕期ころまでには体力も回復し活動を開始したが、再び体調を崩し病床に伏した。そして明治31年(1898)正月29日、54歳の生涯を閉じた。



本庄町にあった蚕種貯蔵庫

翌32年4月、金鑽神社(神川町二の宮)に頌徳碑が建立され除幕式が盛大に行われた。

生涯を養蚕の改良普及に捧げ、全国各地の養蚕農家に大きな影響を与え、各地から九蔵を慕って教えを請う人は後を絶たなかった。日本の近代化に大きな貢献を果たしたのである。

(参考 逸見茂治著『校祖木村九蔵先生伝』児玉農業高等学校 昭和42年刊)



木村九蔵頌徳碑(神川町金鑽神社)

